

現代短歌分類辭典

第 二 卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第 卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

Ⅱ



昭和三十年三月十日初版発行

定価 四〇〇円

著者兼
発行者 津 端 修

印刷者 津 端 亨

東京都中野区上高田一ノ一一三

発行所 イソラベラ社

振替東京六七三四一番

凡 例

一、明治、大正、昭和三代に詣まれた主要な歌十六万首を分類した

一、分類の基準は大体単語を中心としたが、二単語以上に及ぶ場合は、――を挿入して単語の境界線を示しておいた。

一、単語には、ことごとく品詞名をつけた。

一、単語の排列は、五十音順に従った。

一、歌は原作の仮名遣いに従った。

一、単語の説明は、新仮名遣いに従った。

目次

	歌數	頁數		歌數	頁數
あかく〔副詞形〕	六三七	一	あかくーし、	三〇六	〃
あかく〔副詞形〕——倒叙——	一一	五五	あかくーして	三〇	八二
あかく〔副詞形〕——隔語修飾——	一一	五五	赤靴	一	八五
あかく〔副詞形——中止法——〕	一四四	五六	あかくーて	二	〃
あかく〔副詞形——中止法——〕	一四四	五六	赤熊	一	八六
あかく〔副詞形——中止法——〕	一四四	五六	赤雲	三	〃
あかく〔副詞形——中止法——〕	一四四	五六	あかくーも	四	八七
足搔く〔連体形〕	一一	六八	あかくーもーぞ	二	〃
足搔く〔終止形〕	一一	六八	あかくらき	一	〃
赤崩え	五	七九	赤倉山	七	八八
赤茎	八	〃	赤倉岳	一	〃
あかくさ	一	八〇	あかくろい	一	八九
垢臭き	一	八一	あかくろき	一〇	〃
垢臭し	一	〃	あかくろき〔名詞形〕	一	九〇

あーがー心	赤子	吾ーがー子	あかけれーや	あかけれーば	あかけれーど	あかけれ〔結句〕	あかけれ〔上句〕	足搔けーる	赤啄木鳥	足搔けーば	あかけーど	赤毛布	赤髻栗	赤毛	あかくろく
-------	----	-------	--------	--------	--------	----------	----------	-------	------	-------	-------	-----	-----	----	-------

四	五三	一三	一	一六	四	三	五	一	一	一	四	一	一	二	四	六	歌數
一〇五	一〇〇	〃	九八	九六	〃	九五	〃	〃	九四	〃	九三	〃	〃	九二	九一	九〇	頁數

赤さびー立つ	赤錆びーた	赤錆びーしーまま	赤錆びーし	赤錆	あかさーぬ	あかさーなむ	あかさーな	あかさーず	赤坂離宮	赤坂山	赤坂見附	赤坂	藜	赤さ	赤駒	赤鯉
--------	-------	----------	-------	----	-------	--------	-------	-------	------	-----	------	----	---	----	----	----

一	三	一	一六	六	二	一	一	一	一	六	八	九	四八	四一	四	一	歌數
〃	一二三	一二二	一二一	一二〇	〃	〃	一一九	〃	一一八	一一七	一一六	一一五	一一一	一〇七	一〇六	一〇五	頁數

あかしーくらしーつ
あかしーくらすーも
あかしーくらせーば
あかしーけむ
あかしーけり
あかしーけるーかな
あかしーけるーかも
あかしーし
あかしーしーか
あかしーす
あかしーたまへーかし
あかしーたり
あかしーたる
あかしーたる
あかしーつ
あかしーつる
あかしーつるーかな

歌數	頁數
二	一九一
二	〃
一	一九二
一	一九三
二	〃
一	〃
一	〃
一	一九四
三	〃
一	一九五
一	〃
一	〃
一	〃
一	一九六
一	〃
一	〃
二	一九七
一	〃
二	一九八

あかしーつるーかな
あかしーて
あかしーて
あかしーてーむ
あかしーと
あかしーとふ
あかしーとも
あかしーとーを
あかしーながら
あかしーぬ
あかしーぬ
あかしのにゆうどう
あかしびと
あかしほ
あかしーます
あかじみーし
あかじみーたれーど

歌數	頁數
一	一九九
一	二〇〇
二	〃
一	二〇一
一三	〃
二	二〇三
一	〃
一	二〇四
一	〃
四	〃
一	二〇五
一	〃
一	二〇六
二	〃
一	二〇七
二	〃
一	〃

一五一九三三二二一一一四二一九三八一一
二三二二三二〇二〇八

5

あかせーば
赤蟬
あかーせり
あかーせる
赤麻
赤染
足形
県
赤大根
赤嶽
県境
赤襷
赤蓼
あか棚
県人
赤玉
赤玉

七	二	二	一	一	一	四	二	二	三六	一	一	一	二	一	二	一	歌数
二五三	〃	〃	二五一	〃	〃	二五〇	四七九	二四八	〃	〃	二四五	〃	二四四	〃	〃	二四三	頁数

赤濁み
赤濁みーし
赤濁みーた
赤だめーる
赤だも
県守
県居の大人
赤ちやけーし
赤ちやけーた
赤ちやけーて
紅提灯
垢づかぬ
合計

二五九	二六九	二七二	二七五	二、三七八	一	一	一	一	八	二	三	四	一	一	二	一	歌数
二五九	二六九	二七二	二七五	〃	〃	〃	〃	二五七	〃	二五六	〃	〃	二五五	〃	〃	二五四	頁数

作家表
推 奨 (宮終二)
編纂おぼえ書
正誤表

あかく【形容詞の副詞形】「赤く」「紅く」「赭く」「朱く」「明かく」

ク活用の連用形。用言を修飾しているので、形容詞の副詞形といわれている。「古事記、下」——難波宮をみやりたまへば、其の火猶あかく見えたり。「枕草子、三十六」——ゆづり葉のいみじう房やかに艶めき、茎はいと赤くきらきらしく見えたるこそ……。『枕草子、百四十六』——七八尺のかづらの赤くなりたる。「堤中納言物語、かひあはせ」——顔もつと赤くなりて言ひ居たるに、いとど姫君も心細くなりて……。拾遺、二——紅葉せば紅くなりなむ小倉山秋待つ程の名にこそありければよみ人しらず。「後撰集、七」——鏡山やま搔曇りしぐるれど紅葉あかくぞ秋は見えける（素性法師）。『後拾遺集、三』——紅葉せば紅くなりなむ小倉山秋待つ程の名にこそ有りけれ（大中臣能宣朝臣）。

ああ夏も雑草の中にひるがほのほんのりと赤く咲く日となつた

矢代東村

ああ暮鳥君が死んでから北国の林檎はまたも赤くなつたよ

花岡謙二

紅く落つるローマの太陽を見よといふ人ありければここに佇む

斎藤茂吉

あかく

あかく

あかく咲きあかく散るをばよろこびし娘なけれど木瓜をしたしむ

茅野雅子

赤く錆びし小さき鍵を袂にし妻とあかるき夜の町に行く

前田夕暮

赤く曝れし湯の池岸のゆきどまり泥練薬まづしげに売れり

鹿兒島壽蔵

赤く濕疹した都会の皮膚にゐてひたすら繁殖しやうとするもの

前田夕暮

赤くただれた地図の一部にわづかに位置を占めてゐるごみ箱のやうな街

前田夕暮

赤くなり沈まむとする月あれば寂し小床にかへらむとする

小暮政次

紅くなりて傾きそなるあまつ日を戦てらしし光とおもはむ

斎藤茂吉

赤くなりヒステリカルな妻の声うはの空には聞かざるものを

津端修

赤くなるまへの秋山をふりさけて見つしをれば雲しづまりぬ

斎藤茂吉

赤く濁りし八日の月は小夜更けて野稻が嶽に傾けり見ゆ

武知清

赤くにじめる日没と白くけむる花車いきれ強し空気よどめる

前田夕暮

赤くふちどりし氷の旗のさがりたる県道はすぐ土佐にとつづく

橋本徳壽

あかく燃える朝のストオブ椅子よせて思ひたのしむ一本の煙草

曉のさむき光の枯山にあかくさしつつか下僕しもべ起き出づ

あかときの霧つきあげて出づる陽のあやしきほどに赤くゆらめく

秋風に赤く裂けたる無花果の雨のたまりにうつるさびしさ

秋風に蘇るらし瑞々しき薔薇の柔芽の紅くほぐれつ

秋霧を赤く裂きつつ敵手榴彈落ちつぐ中にわれは死ぬべし

秋づきて朝霧さむき街角に夾竹桃のはな赤く散りたり

秋の日は力一ぱい大比叡の夕いだき赤くてらせり

秋ばらの蕾ま赤くふくらみて時化あとの日和定まりにけり

秋彼岸寺のはいりの道端に曼珠沙華紅くこごりつつ咲きぬ

朝々を鏡にうつすわが髪よやすき油に赤くなりぬる

朝顔を紅く小さしと見つるいのち消えむとぞする鳴け鳴け鈴蟲

あかく

西村陽吉

中川一政

神保允子

金子薫園

山田百合子

宮柊二

古泉千樞

茅野雅子

小田千春

若林牧春

安達美子

北原白秋

あかく

あさつく日大きく赤くのぼりきてかなかな蟬の一途なる声

朝な朝な霜ふかからし杉の葉の陽のあたるかた赤くやけたり

朝の日にますます赤し緋のたりや見いるところも赤くなるらむ

朝蜩啼く間みじかしひがし空ひととき赤く焼けて褪せつつ

朝日のただ照る空の遠ほらに赤くうけるは雲のみねかも

浅間嶺は雲がくりゐて引く裾の鬼押出おにおだしの緒くなだれつ

足あかく脹れて雪を踏みかよふ雲水僧の衣みじかし

足柄路越はてぬれば目路のかぎり明く広しも富士の裾野は

あしびきの山ぎはあかくなりながらいてがてにする月の影かな

足もとの磯を染めたる夕づく日泡沫赤く生れるたりけり

汗あえて起き出でぬれば朝ながら赤くあざれし日のすさまじさ

あたたかき二月のゆふべ靄立ちて日はあかく落つその靄の中

和田智恵子

杉浦翠子

茅野雅子

金田千鶴

島木赤彦

高田浪吉

大村呉樓

下村海南

高崎正風

中村憲吉

古泉千楹

大塚泰治

あの時は躑躅も紅く咲いてゐたそつとしのんで逢つた湖岸に

あはつけくかぎろひおこる炭の火のあかくかがやくいろ澄みにけり

雨雲にやまずひびかふ物の首夜はまだふけず赤く濁る月

あまつさへ夾竹桃の花あかく咲きにけらずやわかき男よ

天つ日影赤く灼え立つ真夏日はほとけの肌^{つち}に汗をもつちふ

天つ日の高^{つち}くのぼりて照らすとき地明く走る水も明しも

天つ日の光はわかし翁ぐさ地にぞあかく笑まひ初めたれ

あまつ日は紅くにこりてかがやかず家むらのしたに落ちゆくらしき

蟹少女くろぐろよりて立枯れの林のなかに火を赤く焚く

天地のあかく明けくるこの朝の尊とさ極まり涙出でつも

雨はれし後の谿水いたいたしきのふも今日も赭く色づき走る

雨はれし霜月朝の庭つちにささんくわ赤く散れるさびしさ

あかく

花岡謙二

中村柊花

北原白秋

北原白秋

森二郎

佐藤佐太郎

北原白秋

斎藤茂吉

前田夕暮

伊藤左千夫

斎藤茂吉

西内白穂

あかく

雨ふりてくれぬる空の下にして赤くかたまる花の草むら

あららぎに蔓からみたる唐南瓜赤くみのりて二つさがれり

或る騎手の帽子赤く飛びひるがへりぬ春まだ風の寒き競馬場

青木の実赤くなりたり冬さりてかわききりたる山の斜面に

いかづちの響ける庭に蟻群れて赤く涸びし蚯蚓うごかす

生きて来し丈夫がますらとおも赤くなり踊るを見れば嬉しくて泣かゆ

いくたびも稲妻が赤くたちながら街くれてゆく神田にゐたり

幾日かも解けぬ垂氷は朝宵の煙に赤く煤びてを見ゆ

活け置くに壺の青木のいのちながし青かりし実の赤くなりつつ

石塀の影する赤の鳳仙花茎立あかく立ちしづもれり

板垣の上越す桃の直立てる若枝のつぼみあかくふくらみぬ

一群の雀が去りし田の稲棚に沈む夕陽のあかく差し来も

武田 祐吉

久保田 不二子

水石 三男

木下 利玄

大村 呉樓

斎藤 茂吉

佐藤 佐太郎

門間 春雄

長谷川 銀作

宮 柊二

窪田 空穂

小泉 喜佐久

いちじるくあかくふくらむ木瓜の芽に寒たまれり朝の雨ふる

いつしらずまどろみ居たり陽は赤く截ちさし小切れちらばるなかに

出でて来し杜の樹立に春の日は紅くさしたり顧みすれば

稲抜くとすてたる藁に霜ふりて梢の柿は赤くなりにつけり

稲の葉の葉先葉先の露の玉今宵の月夜あかくてらせる

稲原にわきむらがれる蚊のうなりおとろへそめて月赤く出づ

生命ありてまたも越えゆく千々岩の峠に紅く照るつつじかな

岩かげに立ちてわが吸ふ煙草の火赤く見えたりふかき霧雨

いばらの実赤くならむとするころを金瓶村にいまだ起き臥す

家屋いへの上に百日紅の花あかくこぼれて空はしづかなりけり

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に来て寒けさをおぼゆ

伊予の海の片隅をゆくわが船に月は照らし來赤く落ちつつ

あかく

茅野雅子

川端千枝

窪田空穂

長塚節

久保田不二子

鹿児島壽藏

高田保馬

島木赤彦

斎藤茂吉

前田夕暮

斎藤茂吉

山下陸奥